

第 9 回

『寺社勢力の中世』

～無縁・有縁・移民～

伊藤正敏、ちくま新書、2008年
(中)

中世の主役は「寺社」だ！

今回は伊藤正敏氏の『寺社勢力の中世』の2回目です。前回のメインテーマは「中世の主役は、幕府でも、朝廷でもない」「中世の主役は寺社勢力なんだ」ということでした。中世とは、寺社が、神輿や神木櫓などを利用して人々を威嚇しながら、強大な力をふるった時代、ということになります。神輿や神木を担いでくるのが山法師や奈良法師でした。

今回は、なぜ、「寺社勢力」と言われるほど強大だったのか、という点について、まとめていきます。

強大な経済力・文化力を持つ寺社

中世の日本を動かしていた「寺社勢力」は、なぜ、それほどまでに強大になったのでしょうか？

一言で言えば、強大な「経済力」を持っていたから、と言えます。

著者の伊藤正敏氏は、次のように比叡山延暦寺の経済力の大きさについて指摘しています。

京都の経済は叡山なしには成り立たない。米は叡山領荘園の多い越前・加賀、さらには膝元の近江か

ら来る。それを運ぶ琵琶湖の船運は叡山に握られている。その米を京に運び入れる運送業者もまた、叡山の支配下にある大津・坂本の馬借だ。

ここで、三択問題です。次の質問に、教えてください。

当時の京都には金融業者の土倉が約300軒ありましたが、そのうち比叡山延暦寺に関係するのはどのくらいだと思いますか？ 下記の三択から1つ選んでください。

- ①約100軒（3分の1） ②約150軒（2分の1） ③約250軒（80%）

正解は、③の80%です。なんと300軒のうち240軒が比叡山に属し、「山門気風の土倉」と呼ばれたそうです。本業の他に、金融業を兼ねる酒屋・米屋のほとんど、油屋の大多数が比叡山に収益の一部を納入していました。

土倉は別名「土蔵」と言うとおり、耐火性に優れた土蔵造りの蔵を持ちます。教科書などでは「高利貸し」的側面が強調されますが、実は貸し付けるだけでなく預金も引き受けていて、現在の銀行のような働きをしていました。

ということは、**土倉＝銀行**ですから、強盗団に狙われる存在です。比叡山延暦寺は「盗賊よけ」のために武力組織をちゃんと用意しています。この武力組織＝土倉軍は、貸した金が返ってこないときには、「権取り立て」のための武力組織に変わりました。恐いですね。

ただ、取り立てる行為は寺社の場合、寺社経営ではない一般人の金融業者に比べるとはるかに優位な立場にいたと言えます。なぜだと思いますか？

一般人の金融業者に比べ寺社の金融業者が有利だったのは、**お金を借りた人たちが、仏神のものを借りたのに、もし返済を怠ったりしたら「仏罰や神罰が当たる」という恐怖心を持っていたから**です。ですから、寺社の金融業者の場合、遅滞なく取り立てができたといえます。利息は年率100%を超える非常に高利だったそうです。

ところで、中世の経済とえば、酒屋や土倉以外にも**「座」**が有名ですよ。室町時代に一般的になる土倉や酒屋といった「高利貸し業者」が金融を動かしていましたが、その前から存在していたのが「座」でした。**どんな「座」がありましたっけ。**

そう、**石清水八幡宮を本所とする離宮八幡宮油座や祇園社を本所とする綿座、北野社を本所とする麴座**などが教科書に出てきます。これらの「座」は本所が寺社となっています。「座」に入っていないければ、生産も流通も販売もできない状態でした。もし、座に入っていない者が販売しようものなら、「暴力集団」がやってきて商売ができないようにされてしまいました。一方、「座」に入っている者は**「座役」**を収めることで、商売ができる特権を与えられ、保護されていたのです。

このように、京都は比叡山延暦寺が経済的に支配していたことが分かります。では、他の地域ではどうだったのでしょうか？ 著者が挙げている事例では紀伊国があります。それによると、**紀伊国では全水田面積の何割が寺社領になっていたのでしょうか？ 三択で教えてください。**

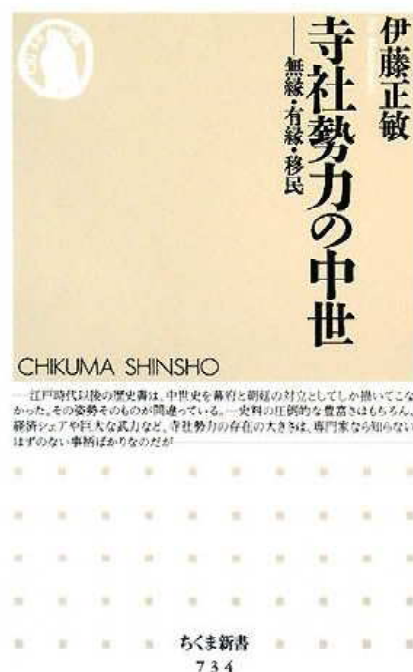
①約3割

②約6割

③約9割

答えは、③です。だいたい8～9割が寺社領となっていたそうです。

大和国では興福寺・東大寺・多武峯・高野山・金峯山領でない土地はないと言って良い状態だったといえます。つまり、中世の日本社会において、**寺社は大荘園領主だった**のです。当然、強大な経済力を持っていたと言えます。



なお、伊藤正敏氏によれば、寺社勢力は荘園領主とはまた別の、「**領主としての顔**」を持っていたといえます。例えば、高野山は領内の武士を軍事力として動員しました。軍忠状と感状が交換され、それが荘官が役職を保持する根拠になったのです。

これって、**御恩と奉公**の関係ですよ。高野山は中世を通じて、領内武士に対し、一貫して主従制の「主」であり続けたのです。「**親分**」が高野山、「**子分**」が領内の武士というわけです。**主従制は武家社会だけの専売特許ではなく、中世社会を貫く規範だった、**と言えるんですね。

このように、比叡山延暦寺は京都の経済を握っていました。でも、経済力だけではありません。「文化力」も持っていました。伊藤正敏氏は以下のように書いています。

日本の古代寺院は、宮殿でもめったに使われない瓦で屋根を葺き、造出のある見事な礎石を使用し、柱や壁に極彩色を施した建造物だ。飛鳥の川原寺は、当時宝石として使われた大理石を礎石として敷き並べている。こんな宮殿はない。寺院は間違いなく当時最高の、皇居以上の豪華建築だ。古代の規模を今に残す東大寺大仏殿をみれば、すぐわかるだろう。中世というとやはり最大の建築は大仏殿だった。

寺社空間はどれほど贅沢だったか？ 戦国時代の京都を描いた『洛中洛外図』をみると、寺院はすべて瓦葺き、御所・内裏・管領邸が檜皮葺、町屋は板葺き、農家は茅葺きまたは草葺き、と明瞭に分けられている。費用は、瓦・檜皮・板・草の順に高価である。風俗の違いではなくステータスの差の反映なのだ。世俗世界は権力者の政庁であっても貧弱な施設を持つに過ぎない。宮殿・御所建築でも、古い時代ほど土に柱を埋め込んだ掘っ建て柱の建物が多く、基礎に礎石を使うことは少ない。俗人の家屋数はたとえ天皇家や摂関家のそれでさえ、東大寺大仏殿・興福寺五重塔・根来寺大塔などの足下にも及ばない粗末なものだった。寺院を超える豪華建築は安土城以前には皆無だ。

比叡山延暦寺や興福寺などの大寺院は、その当時の社会において、最先端技術により創り上げられた空間であり、当時における最も豪華な「前衛空間」なのでした。それだけではありません。著者によれば、

1166年に、中世最初の山城を建設したのは比叡山だ。武士の城館建築よりも先行している。鎌倉武士の城郭は濠と土塁をめぐらしただけの簡単なものが多く軍事性に乏しい。叡山は東塔・西塔・横川の3地区からなり、それが16の谷に分かれ、それも細分化されている。・・・叡山には発掘例の少ない中世前期の山城遺構が保存されている可能性が高い・・・。

と言います。さらに続きます。

中世寺院は学問や技術に優れた僧侶を多く輩出した。鎌倉時代、漢字を書ける武士は少ない。武士の文書の多くはひらがなで書かれている。対して、学侶で漢字を書けないものなど一人もいない。文化度は段違いだ。

寺院では高度な手工業技術が研究され、実際に製品の大量製造が行われた。寺院は先進文明・先進文化を生産し続ける場であった。最高の先生が集まっている教育の場であり、多数の人材を輩出した、中世テクノポリスがここにあった。ルイス・フロイスは比叡山を「日本の最高の大学」と見た。

うーん、経済力に文化力ですか。もちろん、経済力がなければ文化力も持ち得ないと思いますが・・・。とにかく、京都に限らず地域の経済を握り、最先端の文化を併せ持つ延暦寺や興福寺などの寺社勢力のパワーというのは、想像以上に巨大だったようです。

暴力集団？の寺社

さて、織田信長が比叡山延暦寺を攻めて多くの僧侶を殺し、堂塔を焼き尽くしたという話は有名ですよ。そして、「信長は恐ろしい男だ」と結論づけられる場合が多いです。

でも、前提が現在とは違うと思うのです。現在の僧侶はもとより、江戸時代の僧侶も「丸腰」で武器などを持ち歩きません。でも、中世の比叡山などの僧侶は「武装」していましたよね。武装している勢力に「武装解除」を迫ったのが織田信長でした。しかし、信長の命令に比叡山は従いませんでした。だから、信長は比叡山を攻めたのです。それに対して、当然、比叡山の山法師たちは抵抗しますが、多勢に無勢、敗れ去ってしまいました。興福寺の場合は、比叡山延暦寺の様子を見て武装解除しましたから、被害はありませんでした。

この時代の山法師の戦闘服は「武蔵坊弁慶」のようなものだった、と私は思っていました。ずっと、そう信じていました。ところが、伊藤正敏氏によれば、全然違うんです。

悪僧の姿として、法衣をまとった長刀を持った武蔵坊弁慶を思い浮かべる人が多いだろうが、それは誤りだ。(興福寺の)「果たし状」事件の時、興福寺に集まった僧は全部で4,5千人、みな甲冑姿であったと『玉葉』にある。頭は兜で隠れてしまうから、外見上武士と全く同じ姿で区別は付かない。・・・・・・。武士の悪僧は江戸時代に書かれた戦国合戦物語には全く描かれない。いなかったわけではない。武士以外が武器を持つことを禁じられた時代には、僧侶の勇士が存在しては都合が悪いのだ。

えっー、弁慶のような格好をしていたのではない！！ 甲冑を身にまとっていた！！ そうだったのですか。まさに、山法師たちは見た目には武士と区別できない「武力集団」だったわけです。「天下布武」をねらう織田信長からすれば、比叡山の「利権」も問題でしたが、「武装解除」しないと言うことが大問題だったわけですね。

さらに言えば、中世の寺社は「武装組織」である、というだけではありません。なんと武器を製造したり、備蓄したりしていたのです。

小牧・長久手の合戦に対し、徳川家康は高野山に対し、味方に参じ鉄砲500丁を持参すれば、恩賞として大和に2万石の土地を与えようと提案した。大和には家康の所領などない。天下を取らないかぎり、約束は実現できない。関ヶ原の合戦の16年前という時点で、家康が本気で天下を狙っていたという証拠は、こういう文書によってのみ分かるのだ。

感神院の最下層身分の犬神人は、弓のツルを製作することから「ツルメソ」と呼ばれた。南都では鎌倉時代末期に、刀・鎧・兜の製造販売が盛んであった。熊野の鍛冶も頼当てを作っていた。・・・・

根来寺は南北朝時代に弓・矢・楯の製造を行っていた。・・・寺そのものが軍需産業の経営主体であり、武器の備蓄を請け負っているのだ。

伊藤正敏氏によれば、上記のように武器製造とその備蓄が、寺院の主要な産業だったということです。うーん、これには参りました。たしかに、根来衆は織田信長と戦いましたよね。根来は鉄砲の製造もしていました。

ところで、中世において寺社は反対勢力の寺社に対しても、暴力を行使することがありました。この点について、伊藤正敏氏は次のように書いています。

寺社同士の争いとなると、焼き討ちはざらである。叡山は50回近くも園城寺を焼き討ちした。園城寺も叡山を1回焼き討ちしている。

山僧らが堂舎に放火することもあった。1208年、同衆合戦の最中、同衆赦免の噂の中、反対する一部の学侶が、後鳥羽院に抗議する意味で東塔に放火し、宝塔・灌頂院（かんじょう）・真言院・根本中堂回廊・楼門・舞台が焼失した。1264年の光源の内裏・千洞・園城寺放火事件の際には、山上でも講堂・鐘楼・延命院・法華堂・常行堂・戒壇院などが放火された。1435年には、将軍足利義教から関東公方足利持氏との通謀を疑われて根本中堂にこもった僧らが放火して命を絶った。要求が通らない場合、自らの堂舎に放火することは、ごく普通の戦術であった。

なんと、要求が通らなければ自らの寺院を焼いたのです。寺社に対する朝廷や武士の暴力は畏れられはばかられたのに、皮肉なことに**寺社に対する暴力は寺社のみに許された特権だった**のです。

そう言えば、そのあたりのことは教科書にも記述されています。例えば、天文5年（1536年）に起きた事件がありました。これは、延暦寺の教徒と日蓮宗の門徒たちの一揆（法華一揆）がぶつかり合い、延暦寺が日蓮宗の寺院を焼き討ちし、日蓮宗は一時京都から追い出されてしまいました。

さて、この事件を何と言いますか。

答えは、天文法華の乱でした。

中世とは自力救済の時代

では、なぜ中世の日本において、寺社勢力が強大になったのでしょうか？ その背景はどのようなものだったのでしょうか？

それは彼らが武装していることから理解できます。江戸幕府のような、強力な政権が存在していたら、自ら武装する必要はなかったでしょう。現在の日本社会において、武器を持つ人は「警察官」に限られています。その警察官でさえ非番の時には武器を持ち歩くことはありません。

中世日本において、寺社の人々が武装して山法師や奈良法師のように「僧兵」と言われるようになったのは、**寺社勢力の利権や財産を守ってくれる強力な政権が存在しなかったから**です。自分たちの利権（座や金融業から得られるもの）や寺社が保有する荘園などは、放って置いたら誰かに強奪される危険性が高かったのです。現在のような警察も裁判所も存在しないわけですから。弱い者は泣き寝入りするしかない時代だったと言えます。

つまり、中世の日本社会は自分の命や財産・権利は自分で守らなければならない時代だったのです。一言で言えば、**中世日本は「自力救済」の時代だった**のです。

このあたりのことを、伊藤正敏氏の『寺社勢力の中世』では以下のように記しています。

鎌倉幕府の警察権が及ぶのは、六波羅邸とその周辺、ならびに院の御所がある白河や法住寺殿（東山七条）だけで、祇園社領や清水寺領（叡山の末寺）は不入地だった。

中世の・・・幕府の検断権は不完全なものだった。当時の金融業者である土倉は、盗賊に対して自力で戦い、実力による債権取り立てを行った。・・・中世国家が私的取り立てを妨げることはない。中世は自力救済の時代なのだ。政治権力は政府の安全を脅かす暴力を取り締まるだけで、それ以外の問題には関知しない。

中世が「自力救済」の時代である、ということは、寺社だけでなく、農民や町人たちも「悪い奴ら」から自らの命や財産を守るために、つまり「自力救済」するために、様々な工夫や努力を積み重ねていきました。授業の中でもこのあたりのことは強調していますが、具体的にはどういことでしょうか？分かりますか？

そうですね。中世社会において、鎌倉時代後期、近畿地方やその周辺部では、荘園や公領の中に村が生まれました。そして、南北朝の動乱の中で次第に広がっていきました。**このような農民たちが自ら作り出した自立的・自治的な村を何と言いましたっけ？**

答えは、「惣村」でした。（ただし、伊藤正敏氏は「惣村」というのは間違いだと言います。「自治村落」ではなく「自治都市」と言うべきだ、と考えておられます）

惣村では「寄合」という会議が開かれ、**乙名・沙汰人**と呼ばれたリーダーが運営していました。**村掟・惣掟**を定めたり、ルール違反者に対しては村民自身が警察権を行使したりしました。**このような警察権を何と呼びましたか？**

自検断とか地下検断と言いました。

また、自立的・自治的な町である**自由都市・自治都市**も誕生しました。**具体例をいくつか挙げてください。**

はい、堺や博多のような港町や京都のような政治都市がありました。

ところで、堺も博多も日明貿易で繁栄した都市です。堺や博多のような自由都市では、豪商たちの合議によって市政を運営していました。**それぞれ市政を運営していた人たちのことを何と言いましたか？**

堺が36人の会合衆（納屋衆）でした。一方、博多の場合は12人の年行司でした。京都の場合は、町衆が月行事で運営していました。

伊藤正敏氏の『寺社勢力の中世』では、京の町について、下記のように述べています。

15世紀、下京・上京には「町組」と呼ばれる自治組織が発生し、京は自治都市へと変貌していく。祇園会の山鉾を出す富裕民「町衆」が六角堂・因幡堂などの町堂で寄合を持ち市政をつかさどった。京都は幕府の城下町になったわけではない。町組は民衆抵抗組織と言われるが、正反対の側面も持っている。町組は夜回りを行う自警団組織でもある。最初に自警団が現れるのは1430年だ。北野社境内で土倉・酒屋ほかの住人が、「夜行太郎」を決めて交代で夜警を行った。町衆はかつて鎌倉幕府の役割でありその正当性を支えた京の治安維持を受け持ち、室町幕府からそれを請け負う検断代行組織になったのだ。自治組織には違いないが、独立の民主政権と言うことはできず、室町幕府の下部組織として位置づけることができる。とはいえ、こういう自警団は住民意識（地縁という有縁の関係）がない限り、幕府がいくら言っても自然発生するものではないだろう。

しかし、織田信長の後を受けた豊臣秀吉が「自力救済」に関して大きな改革を断行します。まさに「革命」ともいうべきものでした。これって、どんな改革でしょうか？

そう、「刀狩り」ですね。

伊藤正敏氏は『寺社勢力の中世』で次のように述べています。

寺社の刀狩りは政権の悲願であった。院政時代から僧侶が武器を所持することの禁止令が繰り返し出された。・・・・・・・・・・・・・・・・

1585年6月に、初めての刀狩り令が、高野山及び紀州惣国に対して出された。3年後には全国一律に施行される刀狩り令の先駆である。刀狩り令は農村の武装解除令として有名だが、寺社に対しても全く同じものが出された。高野山に対しては「兵具・鉄砲を禁止する。仏事の勤行のみに専念せよ」である。紀州惣国に対しては「弓矢・槍・鉄砲・腰刀を禁止する。鋤・鍬の農具を大事にし耕作だけに専念せよ」であり、全く同じ論理である。



狩野光信作の豊臣秀吉
(高台寺所蔵)

「刀狩り令」は中世日本社会で「常識」であった「自力救済」を否定する画期的な改革、いえ革命だったのです。寺社に対する刀狩りは、農村の「兵農分離」と同じ意味を持つ「兵僧分離」だった、のです。

さらに、伊藤正敏氏は刀狩り令発布（無縁所の終わり）である1588年7月8日を以て中世が終焉し、近世が始まったと考えられています。そして、中世の開幕は・・・無縁所の始まり、祇園社の河東占地、1070年2月20日である、とも。

今回はここまでです。次回が最終回になります。